又著者自らも言はれる如く、九州地方殊に薩摩の密貿易史は、長崎貿易の裏面史とも言ふべき、甚だ重要なるものであるが、之を割愛せられた事は遺憾この上もない。強ひて瑕瑾を拾ふ事は不可能ではない。又異説を立てる事も出來よう。神ならぬ人間の作品は、常に未完成である。然しそれは決して本書の價値と意義とを動搖せしめるものではない。繰り返へして言ふ。舊き問題を東洋史の立場から取り上げられ、之をも鼎の一脚たらしめられた功は永久に銘記せらるべきであらう。この基礎に立ち、更に、當時「天下の台所」として、全國の富の七割までを集めたと稱せられる大阪經濟と、その輸血管なるべき長崎港との關係、近畿地方絹織物業と長崎に於ける絹生絲貿易との關係等、重要且つ興味ある研究にまで發展せしめられねばならない。〔堀井一雄〕

古史辨　第六冊（諸子續考）　羅根澤編著

民國二十七年九月、開明書店出版、目錄一二頁、序文三九頁、本文六八六頁、報紙平裝本二元六角

民國十五年（昭和元年）顧頡剛氏が始めて辨僞の旗幟を植て、古代史料本文批判の方法論に關する自己及び現代支那學者の論文を分類編輯して古史辨第一冊を世に問うて以來已に十三年、冊を重ねる毎に篇幅增大して堂々五六百頁を下らざる大冊を續出し、今第六冊の出版を見るに至つた。本冊は第四冊の諸子叢攷と同じく羅根澤氏の編輯にかゝり、諸子續考と題され、民國二十一年（昭和八年）第四冊出版以後に公表された諸子學の論文が類集されてゐる。所收の論文五十篇は二部に分たれ、上編は羅根澤氏の「晩周諸子反古考」錢穆の「先秦諸子繫年攷辨自序」の通論を冠して以下儒・墨・道・法四家に關する考證を收めるに對して、下編は胡適の「評論近人考據老子年代的方法」に始り、專ら老子に關する論文を集めてゐる。此の編纂方針も亦第四冊の夫の踏襲であつて、第四冊では上編は胡適の「諸子不出於王官論」下編は梁啓超の「論老子書作於戰國之末」を冒頭として之を中心として上編は儒・墨・道・法四家、下編は老子に關する論攷を網羅してゐた。

民國の諸子學術研究は胡適の「諸子不出於王官論」に始ると云はれる。（錢穆「古史辨第四冊序」參照）班固の「漢書」藝文志の諸子の九流派が周代の王室の諸

官職に淵源すると云ふ說に懷疑を抱き、諸子を春秋戰國間の時代を異にし、その時潮の推移に應じて興廢した諸思想として解釋せんとしたのが胡適の議論であつた。諸子學術思想の發展史的考察を導入した點こそ胡適が近代諸子研究の祖と仰がれる理由である。民國に勃興した學術思想の胚胎は更に古く淸末の變法運動期の康有爲、梁啓超兩家の思想中に求められる。顧頡剛氏は康有爲が「孔子改制考」に於て戰國の諸子が古代の聖人に假托した理想制度を提唱し、制度革新の手段とするのは孔子が俑をなし、諸子之に倣つたのであるとの說を以つて近世の古代史學及び諸子の史的研究の新紀元を爲すものとしてゐるのである。(顧氏「古史辨第四冊序」)羅根澤氏は本冊冒頭に收めた「晩周諸子反古考」に於て、右の如き康有爲の所謂戰國の托古思想に對立し諸子の內には起つて來た反古思想を問題にしてゐる。托古が現行の制度に慊らずして、古制に托して改造を行はんとする私學者の自由思想であるに對して、反古とは統治者の政治を擁護して、私學を禁斷せんとする言論統制策を主張するものである。反古思想は先づ墨子に於ては儒家の奉ずる周代の制度を論破する目的の下に構成され援據された理論であつた。然し孔子の托古した周制を破壞した上に、墨子は更に夏制なる托古を行つた。墨子の反古は自己の托古を確立する前提として、他敎の托古を破壞する補助理論に過ぎなかつた。荀子に於ては虞制夏制の先王に托した古制は人間理性にもどるものとして却けられ、後王卽ち周王の制度が據らるべきであると云ふ一般的反古—實は近古尊重—思想を基礎理論としてゐる。商君・韓非子にあつては世が異れば事誼を異にし、制度變革の必要を認める歷史的進化論を基礎とする反古變法理論となつた。更に呂氏春秋に至つては、前述の反古理論の殘存すると共に一方再び托古思想が萠芽した。一般的に云へば戰國初期・中期は托古制、後期は反古思想が流行し、托古が現狀革新論であり、私學の自由思想であるに對して反古は統治者擁護・言論統制策を主張する。托古は封建貴族に反對する沒落貴族或は新興地主中の知識階級の提唱にかゝり、反古は戰國中期以後の王權確立に伴ひ統治階級を代表する思想であると結論せられた。

羅氏の前揭論文に次ぐ錢穆氏の「先秦諸子繫年攷辨

自序」は民國二十四年商務印書館から發行せられた自著單行本の序である。東北大學の武内義雄教授は先秦思想の發達を考へる爲に諸子の時代を定めんとし、史記六國年表を基準とする時に種々の矛盾を生ずるので之を救ふ爲に「六國年表の訂誤」を試み、昭和三年(民國十七年)高瀨博士還曆記念支那學論叢に發表され、後若干の訂正を加へて「諸子概說」の卷末に附錄とされた。錢氏は民國十二年以來、武内教授と同樣に諸子の時代を決定する「諸子繫年」の稿を草し始め、同じく六國表の錯誤多いのに驚き、その校正に志したと云ふ。自序は全くこの六國表校訂の大綱を述べたものである。武内教授と錢氏の六國表訂誤の意圖は同一であり、古本竹書紀年を基準として司馬遷の誤謬を正さうとする方法も類似してゐる。魏國の年代記である竹書紀年による魏の年譜は、二氏殆んど同一の結果に到達してゐるが、齊譜・魯譜等に至つては可成の差違がある。司馬遷の六國年表に對しては古くは林春溥の戰國紀年の如き前淸の學者による校訂の專著もあり、又近くは故新城新藏博士の「孔孟紀年」(高瀨博士還曆記念支那學論叢)或は H. Maspero 氏の「紀元前四世紀に於ける齊王の紀年」La chronologie des rois de Ts'i au IVe siècle avant notre ère. (T'oung Pao 1928) の如き諸論作があるが、猶不明の點が少からず存する。錢氏は武内博士の魯譜に對しては種々の反駁を試みてゐるが、齊譜その他の異同に就ては別に言及してゐない。史記六國表の校訂は極めて困難な課題であり、今俄に錢氏、或は他の諸氏の說の何れを是なりと論斷することは危險であり、又限られた紙面の許さない處であるので、錢氏の「諸子繫年」の根柢たる六國年表に就て、尙疑問の點が少からず存することを指摘するに止める。

本書の所載論文は五十に上り、その著者及論文題目を擧げるだけで既に相當の紙幅を要する、一々の論文の內容に亘つて紹介批評することは紙面の容さぬ處である。下編の老子の年代に關する諸論著に就ては、羅氏が自序中に於て、宋代以後本書に及ぶ迄の二十九學者の說を簡單に要約說明してゐるから、之に就いて見る事が出來る。上編に於ては諸子の極めて個別的な問題が多く、通論としては羅・錢二氏の右二雄篇が注目される。第四冊の諸子叢考に於ては羅根澤自身の論文

が最も多く、錢穆氏の論文が之に次いで多數收められその他に胡適・梁啓超・顧頡剛を始め多數の學者の論文が少數宛あつた。本冊も亦同樣な狀態である。故に羅氏と錢氏の二通論によつて、本書を代表せしめることも決して不當では無からう。羅根澤氏は河北省深縣の人で、淸華大學研究院國學門及燕京大學哈佛燕京社國學研究所の出身で安徽大學中國語文系の專任敎授であり、本書以外に孟子傳論・管子探源・中國文學批評史・樂府文學史の著述がある。氏は諸子の著作年代、流別の考證から始り近年は本書の反古思想の考察に於て一班を示された如く、諸子の思想の生成をその保持者たる社會階級と關連せしめる社會學的な見地を取つて來てゐる。錢穆氏は本貫は江蘇無錫、中學卒業以後は全くの獨學であり、その研究の成果を認められ、遂に北京大學史學系敎授となつた人である。その著作には前述の「先秦諸子繫年」の外、諸子に關するもののみでも墨子・惠施公孫龍等がある。諸子研究に於て先づ史料の精密な校訂による嚴密な年代決定より進まんとする。「先秦諸子繫年」の五百頁の大作はその綿密なる考證の文字により埋められ、文章極めて佶倔で殆んど通讀に堪えない。諸子の思想內容よりも寧ろ外面的な諸子の傳記等の史料の校訂に向ひ、それにより一面的に年代を考證決定せんとした處に長所があると共に缺陷が潛んでゐる。錢氏のはその著「論語要略」に於て我が伊藤仁齋・安井息軒の說を引用し、又林泰輔氏の「周公とその時代」の一部を抄譯した「周公」を出してゐる點から、諸子研究にも本邦の學者、特に武內博士の影響が少からず存すると想像される。

羅根澤氏の前著諸子叢考及本書「諸子雜考」は、錢氏の「先秦諸子繫年」、武內博士の「諸子槪說」と相並び、本文批評を重視する現代諸子學の代表著作である。方法は違ふが馮友蘭の「中國哲學史」の諸子の部分の哲學史的研究も亦之に伍し得る。民國初年の胡適の「中國哲學史大綱」梁啓超の「先秦政治思想史」に比較すれば、近年の諸子學、特にその文獻學的研究の進步に瞠目せざるを得ない。その中にあつて羅氏の書は特に現代諸子學の論文を類集し、その成果を一目の下に展望せしめるものであつて、專門家でない我々史學者に取つては極めて有益な著述である。〔小川茂樹〕